

低の差は一メートル以上もあって、村の南部を東西に流れる堀がその境界となっている。去る昭和二十八年の集中豪雨で本町は大被害を被ったが、この時堀の南部の家屋はどれも水深二・三メートルも水浸しになったが、北側の住宅辺り僅かに床下浸水で難をのがれたのである。この高低の差がある事は、昔より山あり岡ありの証左で楠をはじめどんぐり・櫟等の大樹や竹藪が生い繁り、現在でも森や林の多いことが特徴である。

この村の中央の堀に囲まれた島の中に「郷倉」があった。これも伝承に依れば「郷倉の倉番」となる者は、士族の中で二男か三男坊に限られて命令され懸命に守り続けたという。当時この倉番には鍋島村から雪竹、北川副村から木原、本庄村から重松等ここに移住し、報酬も五石五斗の郷倉番給を貰っていたらしい。かくてこの付近にその分家ができたり、新宅も建築されて漸次拡大したのである。

村落の南部を流れる堀を利用して、昔は広い馬洗い場があった。今次の圃場整備で跡かたもなく撤去されたが、各家に飼育していた水田用の耕馬をここで洗ってやる言わば飼馬の冷水浴場であった。農家では最も貴重な飼馬であるから、馬脚が泥中にねり込まぬよう、そしてけがのないように水底は全部を石材でなければならぬ。そのため慶徳庵付近にあった古い石塔や敷石を並べ敷いて立派な馬洗い場を完成したという。ところが今回の圃場整備で堀をさらえたところ、土葬時代の人骨や葬具類等が数多く掘り出され、往時の墓地だった事が分かった。

この村落の最北端に、浄土真宗本願寺に属する古刹の光徳寺がある。山号を富永山と称し開基は了玄法師で、創立は慶長十九年正月二十六日（一六一四年）である。本堂は先に火災に遭って全焼したが、大正十四年庫裡と共に再建された。光徳寺住職は「松橋」の姓であるが、その沿革と共に「仏閣」光徳寺の欄に記述している。

この邑も戦時中は他村と同様に、人海作戦で共同田植えに励み共同炊事や育児にもはまって、戦争完遂のため懸命に努力した。しかし悲しい敗戦を迎え多数の戦病死者を出し思えば断腸の極みである。

田中地区に関連して東与賀村営による火葬場と避病院があった。火葬場は光徳寺の西方約一〇〇メートル近くに在って、昔はここで死者の火葬をしたが民家に余りに近接している事で現在の場所に移転された。避病院は故山田八郎村長の時代にこの村の西南部に新築され、現在は一住宅となっている。大正・昭和の戦前の頃は毎年夏期ともなれば、赤痢・チフス等の伝染病が流行して、ひどい時には病室は満員となり佐賀市大井樋の避病院へまで患者を運び込んだ事もあった。戦後は飲食品衛生の普及と医学の進歩のために、伝染病もほとんど絶滅した。したがってこの避病院も昭和四十一年六月に閉鎖され、昔の遺跡となっている。

## 一三 作 出

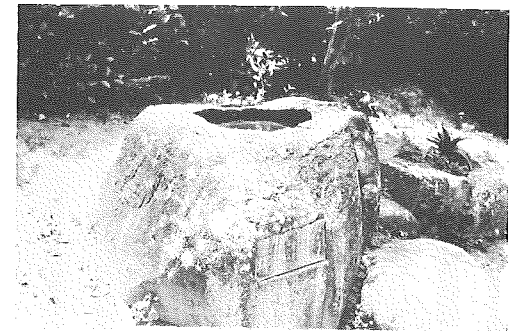
作出は東与賀町の中央よりやや南に位置して南北に細長く、北は町役場や農協等の敷地をも包含し、南は東西に走る町道を狭んで新村に連なっている。現在の世帯数は一二七で本町内では大村落の一つに数えられている。

昔は「作土井」という名称で呼ばれていたが、今は「作出」に改名された。この村の西部にある住吉の「裏土井」が、この邑の中央を東へ連なっている土井を「作土井」と言うことから、この名称が生まれたことは間違

いない。ここに住む檀徒へ本庄町の常照院からの案内状に「造土井」の宛先が書かれてくるが、「作土井」の前は恐らくこの「造土井」の字名であつたらうと推察される。もう数百年も前現在の小中学校の直ぐ南側にあつた土井に次いでこの「作土井」が築かれ、更にこの邑の南方一歳の箇所に「松土井」が構築されその遺跡は現在も残っている。このようにして、わが東与賀の土地は、次々に干拓され南部へ伸びていったのである。この作出も昔は南・中・西周路の三つに分かれていたが、昭和三十年の頃から一班より八班に分けられ大字は田中に属している。

この集落で地理上目立つのは、日常生活に最も関係の深い堀ークリークのことである。どこの村にも縦と横の堀が掘られているが、この作出と中割は縦堀ばかりで横堀は極めて少ない。これは上流の多布施川から流れて来る水流の関係で、水害や干魘の被害から逃れるためであるらしい。しかもいざという急場を考慮して、至る所に井樋を設けてその対策を講じている。ぼんぼん井樋をはじめ数多くの井樋が掛けられており、一時に溢れる水害や日照りの際の水貯蔵に役立てたのである。

この村の産土神社は家屋の一番密集する地帯に鎮座します「龍王神社」である。村社にでも匹敵するほどに立派なお宮であるが、惜しいかな創立も由緒も不詳で明確でない。祭神は大綿津見の神で五穀豊穰と海辺による潮害を防ぐための祈願にこの宮を建てたのである。旧社殿は葺ぶきの屋根で南に面していたが、現在の神社は



神社の手洗鉢

昭和十五年新築完成した。即ち紀元二六〇〇年を記念して再建されたもので、鳥居・手水鉢・狛犬・灯笼などすべてに「紀元二六〇〇年記念」と銘が入っている。鳥居の製作者は石工古賀形衛門である。この紀元二六〇〇年は西暦一九四〇年の昭和十五年に当たり、当時のわが国は八紘一宇・大東亜共栄圏建設を唱えて、軍国主義思想が最も旺盛な時代である。この龍王神社に参詣すると、戦時中における様々な想いが偲ばれて感慨無量である。全国の各地でこの当時、神社や施設ができたが、本町内に紀元二六〇〇年を記念して建設されたのは余り見当たらない。言わば貴重な存在である。

この神社は作出と中割の中央に在り民家の密集する地帯で、住民氏子の参拝を容易にしていることが特徴である。しかも公衆礼拝の施設を備え、境内の中に二〇坪余りの参籠を有し、ここが村民の集会場となり公民館となつて大いに活用されている。例祭は年三回で正月（元旦）・祇園（八月一日）・供日（十月十五日）に開催する。約二〇数年前までは一年一年に当番が決まって、番帳さん渡しも励行されていた。特に祇園は盛大でその年に入団した青年たちの献上した御神燈が、夏の夜空を飾ったものである。その提灯は唐獅子にぼたんや天に舞い昇る龍神等の絵入りの御神燈で、それに氏名を染め抜いて、青年団入団の自覚と決意を神に表明すると共に、その御加護を祈願するものであつた。しかしそうした行事や風習も漸次下火となつて一抹の淋しさを禁じ得ない。

この作出と中割は東与賀町内でも進歩的な面が溢れており、そのことは職業の種別を見て伺い知ることが出来る。職種の多いことは本町内でも第一で、菓子製造・紺屋・医院・理髪業・酒販売・精米所・屋根葺業・薬行商・はた織業・銀行支店・吹織業・縄ない工場等、実に多種多彩である。とりわけ公務員数が一三戸で町内でも最高であり、商工業への発展と新興気分が旺盛である。この事は村落の区域内に政治の本拠たる町役場と産業の中核

たる農協の庁舎があり、作出西側の県道交差点から小・中学校へ至る県道の両側には、郵便局・病院・マーケット・幼稚園・自動車工場・材木店・飯店の外、新宅地の造成に伴って住宅が日増しに建ち並んでいる。したがって昔は閑散でのどかな通学道路も、今日では市街化してまさに「東与賀銀座」への様相を呈しつつある現状である。

## 一四 新村

この村は大正五・六年の頃までは「作出新村」と称し、作出と新村の区長が毎年交替して務めていた。それだけにこの二つの集落は接近しており、歴史的にも因縁が深かった。その後二つに分村して現在の新村として独立したものである。

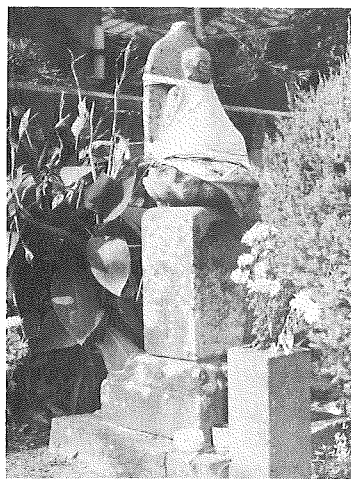
昔はこの村の北部に大きい堤防が東西に走り、西村落の住吉神社北側の土堤と連続していた。即ちこの堤防は住吉方面より新村全体の北側を東部に抜け、村落の東側より北方に向かい作出に達していた。しかしこの土堤も今ではすべて水田と化しているが、それに掛けられた井樋の樋管が残っていて、昔の面影を偲ぶことができる。横尾清輔の亡母の話題を総合すると、その自宅付近に倉庫があったり、免田近くに郷倉もあったらしい。この付近は一面の海岸であって、大小の船が往来していたこと、その船舶には米俵を積んで運んでいた事も確実に覚えていると言う。

現在の戸数は五三戸、その五〇％は農業を営み半農半漁の家が一五％。それらはほとんどが海苔業に励んでいる。残りは建設業・サービス業・公務員等それぞれに家業を励んでいるのである。

この新村のほぼ中央に、菅原道真公を祀る「天満宮」がある。現在も村の東端に「天神免田」が残っているが、昔はここにこの「天満宮」を祀っていたらしい。それを昭和四十年十月この位置に遷宮され、以前葺ぶきの屋根も社殿もすっかり改造され面目を一新した。鳥居は大正十年に建てられたもので、寄進者として横尾儀助外一〇名の姓名が見られ、石工は古賀形左衛門・塚原〇七と刻まれている。

天満宮の例祭は、精進まつりと東まつりの二つのグループがある。資金作りのため経費を少なくする精進組に約二〇名が加入し、東まつりは魚料理を主として約九名が参加している。このお祭りには規約があつて、年一回開催され毎年十月十五日が例祭日である。今年当番の家に番帳さんが回され、当日の賄いについても詳しい規約が決められている。

お宮の境内には地藏さんはじめ塔や石像等が合祀されているが、文化・文政時代（約一七〇年前）のものが多い。古いので安永七年（一七七八年）約二〇〇年前の三界万霊塔がある。文政元年（一八一八）の石像には、施主山崎安兵衛外三名の氏名が刻まれてあり、その外に文政二年と三年と三カ年続けて二体が合祀されている。更に境内の一隅には八大龍王も祀られて、この新興村に安住する人々の信仰心の深さ



三界万霊塔